

平成 26 年度

**新任教員等研修会レポート選集**

北海道私立専修学校各種学校教員能力認定委員会

# ま え が き

北海道私立専修学校各種学校教員能力認定委員会は昭和 31 年に設置以来、永きにわたり、公益社団法人北海道私立専修学校各種学校連合会と共に、教員の能力認定を行うための研修を通じ、多くの優秀な教員の育成に努めてまいりました。

現在、少子高齢化が急速に進み、さらにはグローバル化や情報化、ニーズの多様化など社会環境が大きく変化する中で専修学校各種学校は厳しい状況に直面しているものの、これから社会で活躍する若年者が自らの進路に必要とされる専門知識や技能を身につけ、資格などを取得できる職業教育の場として、専修学校・各種学校が担う役割と重要性、社会から寄せられる期待はますます高まっていくものと考えます。

そのためにも、専門的な知識・技能を身に付けることにとどまらず、社会人・職業人に求められる基礎的な能力を併せ持つよき社会人として評価される優れた人材を育成することのできる教員の資質の向上が不可欠であり、当委員会といたしましても、研修内容をより充実させ、改善や新しい教育方法の導入などを行い、その役割を果たしていきたいと考えております。

このレポート選集は、平成 26 年度の研修会の受講者から提出されたレポートの中から、当認定委員会審査委員の廣川和市先生（札幌学院大学名誉教授）、北守昭先生（EWS 感性科学研究所代表）の審査により選ばれたレポートをご紹介します。

北海道私立専修学校各種学校教員能力認定委員会が専修学校各種学校の教員の資質向上と教育内容の充実に取り組んでいる現状の一端を知っていただくとともに、ご参考になれば幸いです。お手元に届けさせていただき次第です。

# 目 次

## (教育概論)

講 評	：	札幌学院大学名誉教授	廣 川 和 市	.....	4
札幌工科専門学校			喜 多 紀 史	.....	5
北海道芸術デザイン専門学校			土 屋 亮 太	.....	6
北海道芸術デザイン専門学校			宮 中 く る み	.....	7
北海道歯科技術専門学校			井 上 義 典	.....	8
北海道文化服装専門学校			星 野 彩 佳	.....	9
北海道農業協同組合学校			熊 木 政 実	.....	10

## (教育心理学)

講 評	：	WES感性科学研究所代表	北 守 昭	.....	11
大原法律公務員専門学校			畠 山 誠	.....	12
札幌観光ブライダル・製菓専門学校			大 内 智 博	.....	13
札幌商工会議所付属専門学校			石 川 周 二	.....	14
北海道医薬専門学校			高 橋 亜 里 沙	.....	15
北海道文化服装専門学校			星 野 彩 佳	.....	16
旭川医療情報専門学校			三 浦 真	.....	176

(順不同、敬称略)

平成 26 年度北海道私立専修学校各種学校  
教員能力認定研修会(新任教員研修会)日程表

<於:北海道中小企業会館(プレスト1. 7)>

研修日	研修科目	講義時間	講 師	履修認 定時間
7月24日(木)	教 育 制 度 論	9:10~12:20	北海道大学特任教授 木 村 純	4
	職 業 教 育 論	13:20~16:30	プランナー・コピーライター 加 賀 千登世	4
7月25日(金)	専修学校教育論	9:10~12:20	学校法人吉田学園学園長 高 悦 夫	4
	総合自由科目Ⅱ	13:20~16:30	(株)桐光クリエイティブ 代表取締役 吉 田 聡 子	4
7月28日(月)	教 育 方 法 論	9:10~12:20 13:20~16:30	札幌大学名誉教授 佐 藤 勝 彦	8
7月29日(火)	教 育 概 論	9:10~12:20 13:20~16:30	札幌学院大学名誉教授 廣 川 和 市	8
7月30日(水)	教 育 心 理 学	9:10~12:20 13:20~16:30	EWS 感性科学研究所代表 北 守 昭	8
7月31日(木)	総合自由科目Ⅰ	9:10~12:20	オフィス レアリーゼ代表 神 田 裕 子	4
	青 年 心 理 学	13:20~16:30	北翔大学・大学院教授 山 谷 敬 三 郎	4

## 《教育概論》

レポート提出者 25名

### テーマ

自分の経験を振り返りながら専門職業教育を考え直す

### 講評

認定委員・札幌学院大学名誉教授 廣川 和市

今年度の講義では、問題意識をもって受講していただくために、「教育概論」の講義の冒頭にレポートの課題を提示いたしました。

「教育概論」のレポートの課題は、本講義時間内に行う「作業課題および自主課題を通して明らかになった自分の教育についての考え」をもとに、「自分の経験をふりかえりながら、専修学校教育を考え直す」です。

「[専門]教育」の意味は、学生の場合は日が浅いので、広く「教育」について述べてもよいということです。全体的にすぐれた、よくまとめられたレポートが、かなり多くありました。今回は、「自分の経験をふりかえり」、その意味を深めているレポートもいくつもみられました。ただ、なかには、題意を十分把握していないレポートもありました。「本講義時間内に行う作業課題および自主課題を通して明らかになった自分の教育についての考え」をもとに、「自分の経験をふりながら」ということが、自分の経験を述べることに終始しているものなどなどです。

この『レポート選集』には、事実上の第6段階=5の上位=に相当するものを掲載しています。評価基準は、①講義の内容を契機にして展開していること、②自分の「教育」に関する経験をもとに論じられていること、③見解が明確に述べられていること、などです。

ごく少数でしたが、少なからぬ余白や誤字（たとえば講義を抗議、分野を文野）もみうけられました。指定字数枠を活用することに留意され、また、辞書を参考にするようにしてください。

教育法で専修学校が一条校にあたらないうために卒業生や経営側がこうむる不利益を払拭するべく国への働きかけが続けられて来た訳ですが、私は一条校と比べて専修学校に特段の教育上の問題があるとは考えていません。一条校であろうとなかろうとそれぞれの立場に固有の問題はあると考えています。本レポートでは専門学校で教鞭をとる立場になって経験した事を通して専修学校教育を考え直してみたいと思います。

専修学校教員は教員免許が必須ではないため教職課程を受講していない者もいますが、私は必ずしもこの研修が専修学校教員に必修だとは思いません。

なぜなら、高校卒業後の進路としての職業人養成は勿論ですが、会社の要請で入学する者までも同じ土俵に乗せて2年という短い期間の中で資格取得に導くのが専修学校の使命ですから、元々人間形成という割合が薄いと考えているからです。さらに言えば専門知識は一条校を凌駕します。

それよりも専修学校教育で再考すべき事項は短期間での資格取得が至上命題となるが故に試験合格に必要な内容とテクニックしか講義する時間が取れない事です。この時間的な制約により、本来資格を行使するために必要な考え方や思想を置き去りにせざるを得ない現実があります。本当に必要な事は仕事に臨み如何に有るべきかというその人の哲学であり、自分なりの矜持を持つことだと思います。

それを一緒に考えて醸成する時間がない事が専修学校教育の課題であると私はとらえています。その仕事に対する哲学を考える事は卒業生の利益になるのみならず、若年の離職者を減らして、専修学校の社会的評価にもつながっていく事項ではないでしょうか。

その実現に向けて私達はどう行動していくべきかを考察することが必要になってきていると私は思います。

今日、専修学校にかかわらず教育現場では、従来の教員による講義スタイルが見直されている。以前は研究内容や書籍などの情報を得るためにそれなりの労力を要したが、インターネットの普及により情報そのものはある程度であれば容易に手に入り、情報そのものの価値が以前ほど無くなった。そんな中、現在の学生は非常に合理的な考えを持っていて、インターネットを利用すれば5分で入手できる情報を一コマ60～90分、それを何コマも使ってただ聞くだけのことに無意識的に拒否反応を示している。

今、講義スタイルのただ聞くだけの授業では優秀な学生は育たない。彼らに必要なのはインターネットでは得ることの出来ない生の体験である。

また、実際に現在学生である自分もそうなのであるが、今の学生は他の年代の学生に比べて保守的であり、合理的である。そのために未経験の事や一見無意味に思えること、人付き合いなどをあまり好まない。そのために社会に出て働くことを知らなかったり、コミュニケーションが希薄で人間形成が不十分な学生も多い。彼ら(自分も含め)には実際の仕事やその中も人間関係を通して学んでいく必要がある。

現在自分が通っている学校の自分のいる学科ではそうした研修や課外活動、外部講演会への参加機会が多く設けられている。

その体験の中で実際に働いている先輩や講師、職人から仕事内容や職場環境、苦労など多くのことを学び、そういったコミュニケーションから自らの社会性や人間性を成長させることが出来る。また、私の学科では異なる4つの専攻で1つのクラスになっているので自分の専攻だけではなく多様な世界や人間関係の中から学ぶことが出来、為になっている。

以上から、今、専修学校での教育はより多様で実践的な演習体験や、実際の職業体験または、働いている人とのコミュニケーションを通し、知識だけではなく、技術面・人間面で成長できるようになっているべきであると考えます。

教師にもっとも期待した事例について、私は初心者をつまづきに対して授業に期待した事を考えました。

まず、初心者をつまづきに関して初心者がつまづいた場合、二種類の行動を考えることができます。一つは初心者自身が「つまづき」を教師に伝え、指導を求める場合。二つは初心者が発言する事が出来ずに教師に指導を仰げない場合です。私はこの二種類の「つまづき」に関する行動に対して教師がそれぞれに見合った行動をすることを期待します。

前者については比較的対応がしやすいと考えます。初心者自身が教師に対し発言するので、この場合は授業の進行を一時中断し、その「つまづき」に対して丁寧に解説するのが良いと思います。

問題は後者です。何故なら、初心者が自身の「つまづき」を教師に伝えられず、つまづいたままだからです。ではこのような場合はどうしたら良いのでしょうか。

まず、何故初心者が発言できない状況ができてしまうかは、私自身が実際そちら側の人間なのでよくわかります。クラスで発言するという恥ずかしさやつまづきを許さないような雰囲気があるためです。ですから、私が後者のつまづきに対して授業に期待することは、発言しやすい雰囲気の空気を創ることです。具体的にいうと、真剣に取り組む時間とそうでない時間のメリハリをきちんと考えるということです。

しかし、このメリハリを出すことは簡単なことではなく、私もこういったメリハリのある授業というものは数回しか体験がありません。なので、この後者に対しての考えは重すぎる期待なのではないかと思いました。

もう一つ「つまづき」に対して授業に期待したいことがあります。それは、自分がどこにつまづいているのか全員が理解できる指導をして欲しいという事です。「あとは各自で」といったことは教師として良いのかと思います。



## 北海道歯科技術専門学校

井上 義典

専修学校教育は、技術習得の場である。私はこれまで歯科技工士の仕事を通じて身につけた技術を例に考えると、技術習得に必要なことは、1.その分野を好きになること(興味を絶やさない)最初から大好きでなくても、慣れ親しみ好きになる努力をすること。2.継続して(毎日)その技術(仕事)に従事して取り組み続けること。目の前に現れるあらゆるケースに迷わず対応できるようになるまで慣れること。(教科書に出ていないような勘所を身につける)の2つであった。

技術は常に進化していくため、また、やむなく他の職種に転職するために新たな技術を身につけなければならなくなった時のためにも新卒でなくとも生涯学び続け、主体的に考える力を身につけさせることが必要である。

そのために専門学校教育は、端的に手順や作業方法等を教えるだけでなく、仕事の課程で目の前に現れる答えのない問題に自ら最善策を導くことができる能力を育てるよう努めなければならない。

また、専門学校教育は職業教育やキャリア教育という社会的役割を担っている一方、最近では社会人の再教育やリカレント教育の場としてもその重要性は増している。

多様化する学生へ対応していくためには、様々な考えを認めながら社会が必要とする基本的なことを身につけていない人に働きかけ、一人一人に発達させることである。

時に学生は、ある教員を必要とするサインを出すことがある。そのサインは、「授業課題以外で何かに取り組みたい」という積極側や、突然学校に来なくなったり辞めたくなる等の消極側であったり形は様々であった。

この瞬間、臨機応変に適切に対応し、この状況を乗り越えられれば、その学生は精神面で技術習得に向け大きく成長を見せてくれた。その時に必要だったことは、親にも似た愛情と共に学ぶ姿勢であったと思っている。

## 北海道文化服装専門学校

星野彩佳

専修学校は、学生が夢へと一歩踏み出す為の土台作りと、背中を押すとても重要な場所だと思っています。私は小学生の頃から変わらない「自分で服を作ってみたい」という思いで服飾の専門学校へ入学しました。

高校までの教師は、特別学生の夢の為に何かするという事もなく、私自身も教師を頼ることが少なかったのですが、専門学校の教師は常に社会へ向かうことを考えて、沢山のことを教えてくれます。

私の周りに居る教師は、専門分野の知識や技術の他に、実際にその分野の職業で働いた実体験等も話してくれます。私にとって実体験の話は、その分野を目指す者としてとても面白く、興味が湧くと同時に、これから社会へ向かう為の心構えにもなります。

また、専修学校は大学と違って教師と学生の距離が近いように感じます。私が通う学校は、コースごとに担任が居て、多くの時間を共有しています。「つくる」ことがメインで、コミュニケーションを取る機会が多く、教師は学生のことを、学生は教師のことをお互いに知ることが出来ます。これによって、教師は学生の変化に気づいたり、一人一人に合った考え方をを見つけることが出来るのだと思います。そして、学生は分からないことがあったら教師に聞いたり、悩み事があれば相談するということがしやすい環境になります。

私はこの専修学校ならではの距離感やコミュニケーションを、学生としても教師になったとしても大切にしていきたいです。

専修学校の教育として、教師は沢山の知識と技術、社会経験を身に付け、学生がそれを活かして成長できる土台作りをすること、コミュニケーションを大切に、学生の夢を応援したり、背中を押すことが求められ、学生は夢へと向かっていく為の努力や前向きな気持ちを持って学んでいくことが大切なのです。

## 北海道農業協同組合学校

熊 木 政 実

J Aの幹部候補生養成を目的とした、一年生のJ Aカレッジの講師となり、四ヶ月目の新米講師として、現代の定職に就かない若者が多い青年期にある学生が、J A職員(正職員)を目指している姿は、立派だと感じている。

研修会で学んだ「自分の仕事の経験」について振り返ると、前職でのトレーナー研修(外部機関)に基づくO J Tと、自己学習により、基礎知識・スキルの習得と実践を通じた成功・失敗体験の積み重ねが原体験としてあり、30年以上勤務することができた要因となっている。

学生が生涯学び続け、どんな環境においても「答えのない問題」について、最善解を導くためのヒントとして、原体験から、「興味を持つこと」、「腑に落ちること」、「先に読むこと」、「モチベーションを高めること」が重要であると考えている。また、一人一人の学生の自己学習能力の向上(興味・好きになるための環境作り、気づき・やる気の発揚、成功・失敗体験の積み重ね等)のためのスキルも必要となるが、H. ドレイファスの技能獲得の第一段階(初心者)から第二段階に位置付けされる学生がいずれは講師を超えていく存在に成長していく姿を想像することは実に楽しみである。

学生はそれぞれ成功・失敗体験を積んでいるが、特に、就職試験(就職面談)での失敗が多いと感じている。また、学生の関心事は資格を取得すること、就職先がどこになるかであり、様々な形でストレスを抱えることとなる。ストレスの軽減・耐性の訓練と併せてその原因となる「学習」・「コミュニケーション」能力の向上のためには、自己学習のきっかけ(やる気)作りと、真の「コミュニケーション」の実践が重要となる。

今回の研修の受講を契機として、今後の講義・個人面談を活用し、学生一人一人の能力の向上に向けて取り組みたい。

**テーマ**

いま、教育の現場で求められている教育実践力とは何ですか。教育心理学の視点から考えてください。

**講評****認定委員・EWS 感性科学研究所代表 北守 昭**

本年度の授業目標は、教育心理学の視点として、『教師と生徒のコミュニケーション力を高める』、『生徒の目標をサポートする』、『生徒の個性を理解する』、『生徒の潜在的能力を育てる』の4つを掲げ、講義の中では教育心理学の基本的考え方とワークショップを通して、受講者のみなさんが自ら考え、そして教育実践力を体感できるよう組み立てました。

そこで、今回のレポート課題のテーマは8時間の授業を受講した後、これまでの教育の現場を振り返ってみて、①教師と学生の間でどのような事柄(課題)が浮かび上がってくるか、②そして、それを真正面から受け止めるためにはどのような力が必要か、について受講者のしっかりした考え方を求めました。

審査のポイントは、①内容がテーマに合致しており、主張したいポイントを整理して提示しているか。②内容が読む人に分かり易く、かつ具体的であるか、言い換えれば、自分の経験の中から、自分のことばで表現しているか。③字数、誤字、脱字のチェックがなされているか、文章の段落は適切かなど、講義の冒頭で解説しましたレポート作成の4つの基本をしっかり踏まえているかの3点を審査基準としました。

その上で、選集への掲載候補レポートについては評価『5』の20編の中から『特5』の6編を採択し、その内訳は学生1編、教員5編となりました。今回、提出いただいたレポートの内容から、文書力(惹き付ける力)について気づいたこと2点ほどを挙げてみますと、一点目は、文章の書き出しにより工夫を凝らすと、その人の力量(訴求性と奥深さ)が現れてきます。

二点目は、そのためには文章を書いた後、2度読み返して見る。最初は、誤字・脱字、文の構成などのチェックを行う。2度目は、他人の目(第三者の立場)で読み返してみるのがそのポイントです。

課題として、過年度のレポートと比べてみますと、本年度は③の句読点、字数、誤字、段落等の文章作成の基本的な部分はまだ十分とはいえません。来年度は改善策に取り組みます。

人の脳は、2割が意識の部分であり、8割が無意識(潜在意識)の部分から成るということであった。つまり、人の行動においても無意識の領域から発せられている“何か”に司どられているのであろう。この点から考えると、成長段階にある学生が、全ての行動を自らの意思のみで行っているとは到底考えられない。成熟した大人(成人)ですら無意識に司どられているのだから、当然である。

では、教育の現場における学生の行動とはどのようなものが挙げられるのであろうか。一部の学生を除き、大半が自分に甘く、他人に流され易いという傾向が見られるように思う。期限、期日を守らなかったり、学習内容の理解が不十分なまま放置しておいたり、学校行事よりもアルバイト等を優先してしまうのは、最たる例である。ここで疑問が浮かんでくる。このような学生は何故、入学をしてきたのであろうか。入学をせず、フリーターとして生活することは考えなかったのであろうか。

無意識の部分では、無限の可能性を感じているとのことであった。つまり、これから大きく成長するイメージを作り出せるのが無意識となる。所詮、困った学生の指導と優秀な学生の指導は、実は同じなのではなかろうか。一見すると指導方法も全て逆にしなければならないと思える学生であっても、この無意識の領域に働きかければ、解決策が見出せるように思う。

教育の最終形は、学生自らが学ぶ意欲を明確にし、自発的行動ができるようになることと考えている。求められる教育実践力とは行動を促す対話力だと思う。8割の無意識に問いかけ続け、少しでも意識の部分へ昇華させられたら、学生は自ら行動するであろう。表面的な質問だけではなく、学生の無意識、つまり、“心”に聴くことで学生の成長を望めるのではないかと思う。そのような対話のできる教員が求められているように思う。

私は今年4月より初めて教員という職務につきました。それまではホテルの現場で、20年間接客を行い顧客満足という事を念頭に業務を行ってまいりました。

しかし、今は「先生」と呼ばれ何か違和感を感じながら、教育現場に自己流でなんとか4ヶ月過ごしています。

今回この研修を受け教育実践力という事を一から考える良いきっかけになりました。

その中で今の私がやるべき事は「学生の良い所を見つけてのばしてあげる事」であると考えます。自分なりに教育とは何かを色々考えましたが、就任当初は自分のやり方や経験を若い学生にやらせて自分の理想とする「カタチ」にはめようとしていました。

自分が今まで働いていた業界を目指す学生を自分の「部下」と勘違いしてしまっていたのではないかと思います。

まわりの教員の方に比べると教員としての経験が乏しく、何とか出来ないかと考えた結果ではありましたが、やはり学生との距離は縮まらず大変苦勞しました。丁度、今回の研修を受ける前から、考え直しをしていた事もあり、とても有意義であったと実感しています。「良い所を見つけてのばす」という事ですが、今の私はどうしても悪い所ばかりが先に目につき判断をしてしまっていました。

しかし、社会に出て多くの挫折を味わうであろう若い学生にポジティブな思考を伝えてあげる事で、今後少しでも充実した人生を過ごしてもらえないかと考えます。

その為に、今私がやるべき具体的な事は先入観や見た目で学生を判断するのではなく、一人一人の学生としっかりと向きあい、心をこめて会話をする事だと思います。

人の人生を大きく変えてしまう責任ある立場だという事を再確認し、謙虚にとりくんで参りたいと思います。

我が国の少子高齢化が進み、今や学校の存続が危ぶまれている時代となりました。私の両親は昭和28年生まれ、いわゆる“団塊の世代”に近い世代にあたります。

経営資源の中で昭和28年代に無くて、現在にあるものは“情報”です。現代の子ども（学生）は「スマートフォン」を駆使し、いつでもどこでも情報を掴むことができる時代に変化してきました。しかし、良いことばかりではなさそうです。私自身ひしひしと感じますが、若者の「活字離れ」です。漢字を読めない、書けない、新聞を読めない。そして、コミュニケーションが上手く取れない。後者は深刻な問題だと考えています。

教育心理学の視点から“今”必要なことは第一に、三位一体（姿勢・呼吸・こころ）こころを安定させること。『こころが落ち着くと周りがよく見える』からです。

第二に、形のない可能性を具体的な人間の諸能力に形作る課程です。これは2つの見方があり、『形式陶冶』内面に持っている能力そのものに重点を置き、創造性、感性、意志、体力などを鍛え伸ばしていく事。『実質陶冶』技術の伝承に重点を置き、教材を正確に伝え習得させることによって、専門的な技術、知識および学習者の精神の中身を豊かにしていく事。この二つがあります。

私の懸念しているコミュニケーションの劣化を改善させる方法として、「話すポイントを三つ位にしぼる」「終わりにもポイントを確認する」。両者は話し手が主になっていますが、聞き手に話を伝えるには「伝える」→「伝える（噛み砕いて）」に変化させる必要させる必要があります。

また、本当に伝わっているのかヒアリングをするのも大切ですが、こちらが表情や態度、声の調子を読む能力が必要不可欠となります。

いま、教育の現場に求められる教育実践力は、『こころ』に届く聴き方、『こころ』に届くことば（伝え方）です。

教師と学生のコミュニケーションを高めること。これがいま、教育の現場で求められている教育実践力である。

実際の授業でも、学生に上手く伝わっていないと感じることが多々ある。それは、「授業でこれを伝えなければ」という気持ちが強すぎて、あれもこれもと情報を盛り込み過ぎているからである。わかりやすく伝えるつもりで様々な情報を付加した結果、肝心の要点が伝わっていないのである。そして、要点が何かわからなくなった結果、学生は聞くことを諦めてしまう。これは、話し手が一方的に伝えており、聞き手とのコミュニケーションを意識できていないからである。また、情報を自分が理解せずに話してしまった結果、上手く伝わらないという事例もある。

では、話し手だけで授業を変化させることが出来るのであろうか。話し手の変化は勿論だが、聞き手の協力が無ければコミュニケーションは成立しない。聞き手に要点が伝わって初めて成立と言える。聞き手の協力を仰ぐためには、話し手が聞き手の感情に訴える「伝え方」をしなければならない。そのためには、伝えたい内容で例え話をしたり、物語風に話すなど老若男女がイメージできる工夫も必要である。

授業は「コミュニケーション」。話し手と聞き手という別々の立場のものが譲り合い、一つにならねば成立しない。そのためには、一方的に伝えてはいけない。聞き手の立場になって「伝える」努力、そして知識や論理以上に自分の感情を織り交ぜ、学生の心を動かす力が求められていると考える。そして、授業の最後に学生に一番印象に残ったことを確認してみる。一方的でなく、このようなやりとりも大切である。更に、学生を理解する姿勢も必要である。

それは、質問に対する返答からだけではなく、表情や態度などの動作から感じなければならない。伝える・聴く・理解するという三点を実践する力が必要だ。



私は、学生の目標をサポート出来る教師が教育現場で求められていると考えました。

私には常に目標があります。例えば、「作業スピードを上げよう」や「もっと面白い物を作ろう」等という日常的事業や、失敗したり、上手くいかないことがあった時に、次へ向かう為の目標を立てます。

しかし、目標を立てるだけではなく、それを実現する為の計画や行動も大切なのです。

私は目標を沢山立てますが、その中で実行されるのはほんの少力で、なかなか行動に移さず何もしないことがあります。この様な学生はきっと私の他にも沢山居るでしょう。

そこで教師は、学生一人一人とコミュニケーションを取り、まずは目標の方向性を見つけることが必要になります。

方向性の見つけ方として、GROWの法則を使います。GOAL（目標）、REALITY（現状）、RESOURCE（資源）、OPTIONS（方法）、WILL（着手）の頭文字を当てはめた「ひとつの成長モデル」を意味し、教師がこの一つ一つに関わる質問をし、それに学生が答えていくことで、目標の方向性が見え、実現への第一歩を踏み出すことが出来ます。

次に大切なのは教師が学生との対話によって、やる気を引き出すことです。学生の目標に耳を傾け、まずは「なるほど」や「いいですね」と受け入れるのです。すると学生に自信が付き始め、「他にないか？」「具体的には？」と続けると自然に目標実現への道が開かれます。

学生自身が努力することも大切ですが、教育として教師が学生の背中を押し、学生がよりやる気と自信を持って取り組むことが出来る環境づくり、日常的にコミュニケーションを取り、教師は学生の『こころ』の中にある想いに耳を傾け、その『こころ』に響く言葉を届けるといことが教師に求められ、目標をサポートする上でも必要不可欠なのです。

専門学校の教員となり2年目を迎えた。前職は医療機関で医療事務職員として約16年間勤務していた。この間、専門学校の非常勤講師として6年間、また、現場で新人や若手職員の指導を行ってきた。その経験から「学生の目標をサポートする」をテーマに考えてみたい。

病院職員時代は、新人や若手職員を指導する立場にあり、年2回だが面接を行い前年度の目標の達成度の確認、また、達成できなかった場合には何が原因なのか、次年度に向けての目標の設定等を話し合った。お互い社会人であるし、病院組織上の関係から厳しく、また時には力で押さえつけるようなこともあったかと思う。しかし、同様の指導方法では専門学校の教育現場では通用しないと痛感している。

学生の目標を設定するにあたり、「GROW」の法則を使い、目標の明確化、現状の理解、資源の発見、選択肢の創造、目標達成の意思を学生らに書き出させる。これを基に、まず学生から話を「聞く」のではなく「聴く」事が重要だ。そして、学生の話聴いた上でまずその意見や考えを尊重し、頭から否定するのではなく、「なるほど」から始めることが大切であろう。

そして次に「他の考えはないか」等のフレーズを使い学生の思い、考えを引き出す。そこから最終的には具体的な考え、それをいつまでに達成させるのか期限を設定することも必要だと考える。

私は、教員としての経験は浅いが、厳しい病院という業界で仕事をしてきたという自負もある。

その経験を活かし、今後は学生と向かい合って行きたい。まずは学生から五感を使って話を聴くこと、その考えに「なるほど」から始め、そこから私の今までの経験からの意見、考え方をネガティブな言葉ではなく、常に前向きな言葉で単に「伝える」のではなく聞き手の心に響くよう伝えて行きたい。